

出島オランダ商館跡

1614 年にキリスト教宣教師の追放令を出した後、幕府はジレンマに直面しました。ポルトガルとの貿易は継続したかった他方で、一般民衆を毒する神父やキリスト教に関係する品物が日本に入ってくるのは防がなくてはなりません。1634 年から 1636 にかけて築かれた人工の島「出島」は、この問題に対する幕府の解決策でした。この島は、ポルトガル商人を一般民衆から隔離して一カ所に集めるとともに、到着した船の乗組員と積荷を入念に調べることができる場所でした。

出島が完成した翌年の 1637 年に勃発した「島原の乱」により、事態は思わぬ方向へと動きました。キリスト教は島原の乱の原因のひとつに過ぎなかったものの、幕府はこの反乱の動機を完全に宗教的なものと見なしました。そのため、1639 年、ポルトガル船は日本への入港を全面的に禁止され、出島はもぬけの殻となりました。これは長崎の商人にとって二重の痛手でした。長崎の商人たちは、ポルトガル人との貿易に頼って商売をしていただけでなく、出島の外国人商人のための住宅建設に出資していたのです。彼らはオランダ商館を平戸島から出島に移すように働きかけ、幕府は 1641 年にこれに応じました。幕府がオランダ人を認めたのは、オランダ人は実利的なので宗教よりも貿易を優先することをいとわないだろうと考えたためです。その後、江戸時代（1603-1868）の終わりまで、出島は西洋の品物と知識を入手する唯一の窓口となりました。

半々に分かれた島

出島は大きく二地域に分けられます。西側の半分には江戸時代の建物があります。中でも注目すべきは、商人たちの代表者の住居（Chief Factor's Residence）と「カピタン部屋（First Ship Captain's Quarters）」です。これらには日本人が「ガラスの障子」と呼んだ窓がついており、畳の上に当時のオランダの家具が置かれた和洋折衷の内装が施されていました。出島の西端にある海門は、かつては直接海に面していました（埋め立て工事が行われたため、現在は道路に面しています）。輸入品の窓口も輸出品の窓口もそれぞれひとつだけだったので、十字架やメダルなどのキリシタン関連の禁制品の調査を容易に行うことができました。

島の東半分には、明治時代（1868-1912）の建物が並んでいます。出島神学校は、キリスト教が解禁された 5 年後の 1878 年に建てられました。1903 年に設立された長崎内外倶楽部は、イギリスの紳士クラブをモデルにした団体で、日本人と西洋人が交流する機会を提供することを目的としていました。長崎内外倶楽部は大浦から出島に移されました。

出島の様々な建物内に、最盛期の出島で取引された日本の輸入品（砂糖）と輸出品（銀、後に銅や磁器）や、オランダ人が使っていた日用品について学べる展示があります。